

—わが郷の先覚者—

清 水 宗 徳 展

平成八年九月二十一日(土)～十一月十日(日)

山口修司氏蔵



狹山市立博物館

〒350-13 埼玉県狹山市稻荷山1-23-1

稻荷山公園(ハイドパーク)内

TEL. 0429-55-3804 FAX. 0429-55-3811



開催にあたって

明治時代の狭山市域において、殖産興業を中心にその近代化を強く推進した人物に清水宗徳がいます。同人の生き方とさまざまな業績は、1914(大正3)年に出版された『清水宗徳翁小伝』にまとめられていますが、今回はこの『小伝』の記述を基本にすえ、その内容を諸資料で紹介することとしました。

狭山市域の近代化に巨大な足跡を残した清水宗徳は、1843(天保14)年に上広瀬村(狭山市)で生まれ、1879(明治12)年には入間郡から第1回埼玉県会議員に選出されました。また、1890(明治23)年には、国会の開設に伴い第1回衆議院議員に埼玉2区から当選しています。

清水宗徳は、地方政治や国政にも参画しましたが、生涯をとおして情熱を注いだのは、狭山市域の近代化であり、1877(明治10)年には上広瀬村字河原宿に県内最初の器械製糸工場である暢業社を設立しました。同社は、当時としては画期的な設備を誇り、そこで生産された生糸は外国商館から高い評価を得ました。また、当市域の特産物であった斜子織の改良にも努め、広瀬斜子が全国に名声を得るうえで大きな役割を果たしました。さらに、産業の発達を図るには交通機関の整備が急務であると考え、川越から入間川・所沢を経て国分寺にいたる川越鉄道(現西武新宿線と国分寺線)の敷設に積極的な活動をつづけました。また、入間川から飯能にいたる入間馬車鉄道株式会社の経営にもたずさわりました。これら諸事業のほかにも、入間川の砂利採掘事業や鉄工所の経営も手がけています。

以上のように近代化を進める一方で、北海道開拓にも情熱をかたむけ、現在の北海道空知郡奈井江町の基礎を築きました。

今回の企画展では、清水宗徳の業績に係わる文書等を中心に展示、紹介します。多数の皆様方にご覧いただければ幸いと存じます。

最後に、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の出品を快くご承諾くださいました所有者、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成8年9月

狭山市立博物館

◆開館時間 午前9時~午後5時

◆休館日 9/24、9/27、9/30、10/7、10/11
10/14、10/21、10/25、10/28、11/5

◆入館料 一般150円(100円)
高校生・大学生100円(60円)
小学生・中学生 50円(30円)

※()内は20名以上の団体



青年期の清水宗徳(山口修司氏蔵)

講演会

演題 「わが郷の先覚者 —— 清水宗徳」

日時 平成8年10月13日(日)
午後1時30分~3時30分

場所 狹山市立博物館 研修・講義室

講師 狹山市文化産業特別功労者 山崎滋夫 氏

●受講希望の方は、9月18日(水)から狹山市立博物館へ電話でお申込み下さい。(定員50名)



●西武池袋線「稻荷山公園駅」から徒歩3分

●西武新宿線「狹山市駅」西口からバス(稻荷山公園駅行)終点徒歩3分



狹山市立博物館

埼玉県狭山市稻荷山1-23-1 稲荷山公園(ハイドパーク)内
TEL. 0429-55-3804 FAX. 0429-55-3811

—わが郷の先覚者—

清水宗徳展

平成八年九月二十一日（土）～十一月十日（日）



狹山市立博物館

〒350-13 埼玉県狭山市稻荷山1-23-1

稻荷山公園（ハイドパーク）内

TEL. 0429-55-3804 FAX. 0429-55-3811

●西武池袋線「稻荷山公園駅」から徒歩3分

●西武新宿線「狹山市駅」西口からバス（稻荷山公園駅行）終点徒歩3分

開催にあたって

明治時代の狭山市域において、殖産興業を中心にその近代化を強く推進した人物に清水宗徳がいます。同人の生き方とさまざまな業績は、1914(大正3)年に出版された『清水宗徳翁小伝』にまとめられていますが、今回はこの『小伝』の記述を基本にすえ、その内容を諸資料で紹介することとしました。

狭山市域の近代化に巨大な足跡を残した清水宗徳は、1843(天保14)年に上広瀬村(狭山市)で生まれ、1879(明治12)年には入間郡から第1回埼玉県会議員に選出されました。また、1890(明治23)年には、国会の開設に伴い第1回衆議院議員に埼玉2区から当選しています。

清水宗徳は、地方政治や国政にも参画しましたが、生涯をとおして情熱を注いだのは、狭山市域の近代化であり、1876(明治9)年には上広瀬村字河原宿に県内最初の器械製糸工場である広瀬製糸場(後の暢業社)を開設し、翌年から本格的な操業を開始しました。同社は、当時としては画期的な設備を誇り、そこで生産された生糸は外国商館から高い評価を得ました。また、当市域の特産物であった斜子織の改良にも努め、広瀬斜子が全国に名声を得るうえで大きな役割を果たしました。さらに、産業の発達を図るには交通機関の整備が急務であると考え、川越から入間川・所沢を経て国分寺にいたる川越鉄道(現西武新宿線と国分寺線)の敷設に積極的な活動をつづけました。また、入間川から飯能にいたる入間馬車鉄道株式会社の経営にもたずさわりました。これら諸事業のほかにも、入間川の砂利採掘事業や鉄工場の経営も手がけています。

以上のように近代化を進める一方で、北海道開拓にも情熱をかたむけ、現在の北海道空知郡奈井江町の基礎を築きました。

今回の企画展では、清水宗徳の業績に係わる文書等を中心に展示、紹介いたします。多数の皆様方にご覧いただければ幸いと存じます。

最後に、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の出品を快くご承諾くださいました所有者、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成8年9月

狹山市立博物館

付記

- このパンフレットは、平成8年9月21日(土)から11月10日(日)まで開催する平成8年度秋期企画展「—わが郷の先覚者— 清水宗徳展」のパンフレットである。
- 会期中に展示替えを行うため、パンフレット収録(展示資料一覧)の資料でも展示されていない場合がある。
- 展示に関する名称及び表記は、原則として『清水宗徳翁小伝』に準じて用いた。

例：ななこおり=斜子織・七子織・魚子織→魚子織

協力者一覧(順不同・敬称略)

山崎 滋夫	岸野 七郎	柏谷 義一	内藤 信次	埼玉県立文書館	西武鉄道株式会社
山口 修司	関口 重夫	野口 照明	宮野仁太郎	広瀬神社	憲政記念館
内藤 敏男	齊藤 武司	山崎 忠男		奈井江町教育委員会	入間市博物館
清水 忠男	高橋 彦一	木村 芳子		奈井江神社	株式会社総北海

参考文献

- 『奈井江町百年史』上・下巻 北海道空知郡奈井江町
- 『せせらぎ』奈井江町宮村開基百年記念実行委員会
- 『所沢市史』近代資料編Ⅰ 所沢市
- 『狭山市史』近代資料編 狹山市
- 『狭山市史』通史編Ⅱ 狹山市
- 『地域に尽くした人 清水宗徳』 権田恒夫
- 『日本大百科全書』 小学館

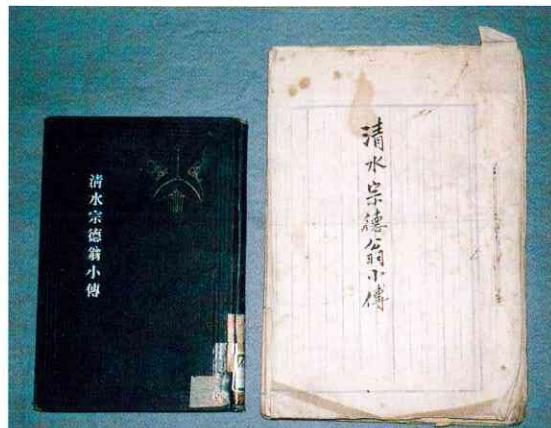
1.『清水宗徳翁小伝』について

本書は、宗徳の多岐にわたる業績を讀えるとともに、これを後世に伝えるため、1909(明治42)年に編集され、1914(大正3)年に出版された。

編著者は古谷喜十郎で、当時としては珍しく口語体で書かれている。これは、明治という維新後の新しい時代に、いたずらに旧習に固執することを嫌った時代の先覚者である宗徳の思想を反映させたためである。

内容は、宗徳の66年間の生涯の概略を述べた緒言を皮切りに、以後14の項目にわたりて彼の業績がそれぞれ述べられている。

各々の項目(目次)は次のとおりである。



清水宗徳翁小伝 (右は原稿)

1.緒言	6.板紙の製造 附其他の興業	11.教育事業とその著作
2.蚕業の改良	7.交通機関の布設	12.敬神と韻事
3.生糸の直輸出	8.砂利の採掘	13.晩年の抱負
4.魚子織の奨励	9.鉄工場の設立	14.結論
5.拓地の開墾	10.政界の活動	

これに、巻頭には国学及び漢学の師である井上頼闇、当時の衆議院議員柏谷義三、そして公私にわたり、親交のあつた小林拾三の宗徳を顕彰する言葉が序文として載せられている。

2. 清水宗徳プロフィール

宗徳は、1843(天保14)年12月11日、父 寛一・母 勢津の長男として上広瀬村(狭山市)で生まれた。幼名を要治郎と呼び、後に宥三と称し、またその後、宗徳と改めた。幼少の頃から利発であった彼は、1855(安政2)年に学を志し、梅沢台陽に師事して筆跡を学び、1864(元治元)年には井上頼闇の門をたたいて国学と漢学を修めた。

清水家は、代々名主を務めるかたわら、広瀬神社の祠官を兼ねる家柄で、1863(文久3)年1月、宗徳は父の跡を継いで名主となり、廃藩置県後は戸長兼民事取締役及び開拓勧農掛に任命された。名主・戸長時代の実績が人々に認められ、1879(明治12)年には入間郡から第1回埼玉県会議員に選出された。県会議員時代の活動の重点は、勧業と社会資本の充実、それに衛生面に置かれていた。また、宗徳は、1890(明治23)年7月、国会の開設に伴う第1回衆議院議員選挙において、埼玉2区から高田早苗(後の文部大臣)とともに当選を果たしている。



青年期の清水宗徳

しかし地方政治や国政のほかにもっとも情熱を注いだのは、ほかでもない狭山市域の近代化であった。蚕業の改良、交通機関の敷設、砂利の採掘、鉄工場の設立等、市域の近代化を推し進めた。また、これらの諸事業のほかに北海道開拓も手がけている。しかし、晩年自身が「郷里を理想の郷にして、産業を興して太平の光景を楽しむことである」と語ったような地域経済構想は、自らの手では実現できず1909(明治42)年に66才の生涯を閉じた。

3. 蚕業の改良・生糸の直輸出

埼玉県は、わが国屈指の蚕糸業地帯として古くから知られていた。入間・高麗の両郡は、こうした蚕糸業の発展を支えた中核の一つであった。しかし、養蚕を中心とするもので、蚕種生産を欠いたものであった。そこで宗徳は、1870(明治3)年に村有の荒れ地を開いて桑の栽培を奨励し、小作民には苗を与えて培殖させ、1875(明治8)年には養蚕室を設けて模範飼育法を施し、近隣有志の参考に供するとともに、見習生を募集して習熟させた。また、数名の者を選んで農商務省農務局養蚕試験場へ入所させ、技術の習得を待って川越町に蚕病試験所を設立し、数年間に50余名の伝習生を養成したと言われている。さらに、1876(明治9)年には、宗徳自らが工員を率いて上州の富岡製糸場をはじめ、前橋・伊勢崎所在の製糸場数カ所を視察したり、妻の勢喜を含む婦女数名を群馬県勢多郡の関根製糸場に送り器械製糸の技術を習得させた。そして1876(明治9)年、埼玉県最初の器械製糸工場広瀬製糸場(後の暢業社)を上広瀬村字河原宿に設立した。同社は、木製の製糸器械30組を据えつけたもので、女工60人を配し、煮繭には、蒸気釜を使用するという大器械製糸工場であった。

暢業社製の生糸が外国商館から高い評価を得たことから、明治10年代には相次いで器械製糸工場が設立された。1880(明治13)年、宗徳はこれらの製糸工場を結集して、川越町の第八十五国立銀行内に暢業会社を設立した。同社は、当初は横浜売込商を通じて生糸輸出を行っていたが、1881(明治14)年、外国商館の商権独占に対抗するために全国の製糸家を結集して同伸会社が設立されると、暢業会社は同伸会社へ委託して生糸の直輸出を行うようになった。同伸会社は、新規参入の直輸出会社であつたにもかかわらず、操業後わずか2年足らずで、同社の売上額は在ニューヨーク直輸出商の最大手であった貿易商会を追い抜いた。

4. 魚子織の奨励

幕末・明治期を通じて埼玉県は全国屈指の機業県であり、狭山市域を含む入間・高麗両郡は、そのなかでも中心的な機業地の一つであった。当市域の特産物として知られたのは、郡内全織物生産額の5割前後を占める魚子織であった。魚子織は、「往昔販路開けず僅かに川越商人に属した」(『ななこ織の碑』)と言われるように、江戸開市のころから「川越魚子」として川越商人の手を通じて江戸の市場に搬出され、三越・大丸などの豪商の店頭において好評を博していた。魚子織の主産地が、水富・柏原・奥富・入間川の諸村であつたにもかかわらず、「川越魚子」と呼ばれたのはこのためであった。1877(明治10)年、宗徳が創設した器械製糸工場暢業社を視察した埼玉県令白根多助は、「ななこおり廣瀬の浪のあやなるを、たれ川越の名に流しけん」と歌い、広瀬こそが魚子織の本場だとして土地の人々を励ました。入間・高麗両郡の魚子織は発展をつづけ、1902(明治35)年頃には最盛期を迎えた。

こうした魚子織の発展の要因の一つに同業組合の設立があげられる。1885(明治18)年に宗徳は、魚子織の品質改良と販売の拡張を図るには、団体が必要であると生産者に呼びかけ広瀬組を結成した。広瀬組は、製品検査と合格品への商標貼付を通じて品質を維持・改良するとともに、他の濫造製品が混ざることを防いだ。広瀬組の商標には、前述の埼玉県令白根多助の和歌が用いられた。広瀬組は、同業組合準則に基づく法的裏付けのある組合ではなかつたが、粗製濫造を防止し、広瀬魚子が全国的な名声を得るうえで、大きな役割を果たした。広瀬組の魚子織は、表に見るように内外の博覧会において数多く入賞するようになった。

年 次	博覧会・共進会名	成 績
明治21年 同	1府6県連合主催茨城県共進会 第2回入間高麗郡立共進会	4等賞 2等賞
明治23年	第3回内国勧業博覧会	有功3等賞
明治25年	第3回入間高麗郡立共進会	1等賞
明治26年 同	1府6県連合主催栃木県共進会 米国シカゴ主催コロンビア世界博覧会	6等賞 名誉賞状
明治28年 同	第4回内国勧業博覧会 入間高麗郡重要物産品評会	有功2等賞
明治30年	オーストリア白魚子の切本を要請	1等賞

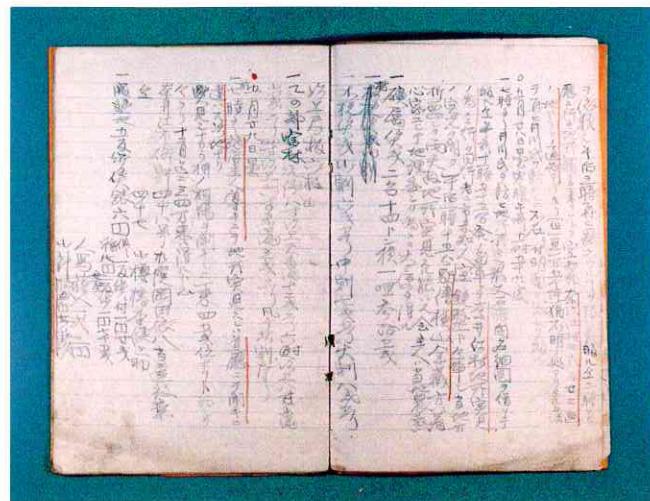


魚子織羽織

5. 拓地の開墾

入間川の流れに面した上広瀬村字河原宿は、石が多く荒れていて農耕には適していなかった。そこで宗徳は、この地の水利を用いて製糸業を興したり、荒れ地を開拓し、小作民には苗を与えて桑の栽培を奨励したりした。

また、宗徳は、遠く北海道に目を向けこの地の開拓に情熱を注いだ。1892(明治25)年には北海道に渡り、北海道庁拓殖課の勧めで石狩国空知郡奈井江村字奈江(空知郡奈井江町)の山林原野を開拓予定地とした。実測調査の結果、肥沃地であつたため宗徳以下24名によりただちに貸し下げを願い出て、その許可が下りると開拓に着手した。しかし山のように木々が生い茂る原野を切り開くことは、少人数ではなし得るものではなかつた。そこで宗徳は、二男の一三を北海道に渡らせて開拓事業に取り組ませ、自らは北海道移民事業に専念した。しかし移民事業は、資金不足もあって思うようには運ばなかつた。それでも宗徳の開拓事業はそれなりに前進し、1894(明治27)年には、水田用の水取口の堤防地を北海道庁から借受け、また奈井江川の用水権を得て、自己管理地の水田化も図つた。また、副業として、養蚕業にも力をいれた。さらに宗徳は、自己の管理地内に郷里水富村の広瀬神社の祭神を祀つた奈井江神社を建立し、心の支えとした。こうして現在の奈井江町の基礎を築いたが、宗徳の開拓事業は成功せず、1901(明治34)年に郷里に引き揚げた。



北海道渡道日誌

6. 砂利の採掘・鉄工場の設立・板紙の製造 附其他の興業

明治時代の入間川は大洪水のたびに氾濫し、田畠に甚大な損害を与えていた。その当時、東京・横浜等市街地においては、都市発展の中で砂利の需要が高まっていた。しかし一方では、市域の人々は、経済の不況に伴つて低賃金労働を強いられ、加えて就業難に陥つていた。

こういった状況下の1896(明治29)年、宗徳は入間川の砂利採掘事業を興した。この事業により、入間川の治水対策を推進し、東京・横浜等市街地の砂利需要に応え、また職業に就けなかつた人々に職を与えて彼らの生活を救済し、さらに砂利運搬を川越鉄道に委ねることにより同鉄道の運賃収入を増やし、同社の業績を向上できると考えたのである。

1900(明治33)年1月、入間川から採取した砂利を東京方面に運搬・販売することを目的とした入間川砂利合資会社を設立し、本社を水富村大字上広瀬に、支店を入間川町において。そして、同年7月には、東京都豊島郡内藤新宿町(東京都新宿区)の新宿停車場前にも支店を増設した。

同社の経営は、その後も順調に発展し、1912(明治45)年の採掘面積は、50万歩余(約165ヘクタール)、年間販売高は89万円に達した。

製糸工場や交通機関が発展するにつれて、鉄工場設立の必要性が生じた。鉄製機器の場合、例えば歯車一つが破損しても、その都度専門の修理工場に修理を依頼しなければならなかつた。そこで宗徳は、1902(明治35)年に入間川町に鉄工場を開設して、二男の一三を主任にあて、蒸気機関から工業用諸器械にいたるまでの製造と修理を営ませた。需要の急増により、数年後には手狭となつたため、水富村大字上広瀬に大工場を建設せねばならなかつた。またその他にも、板紙の製造場や製糸工場施設の水利を用いての水車を建設したり、あるいは牛乳搾取場を開いて一般の需要を満たしたり、衛生問題についても深い関心を寄せていた。

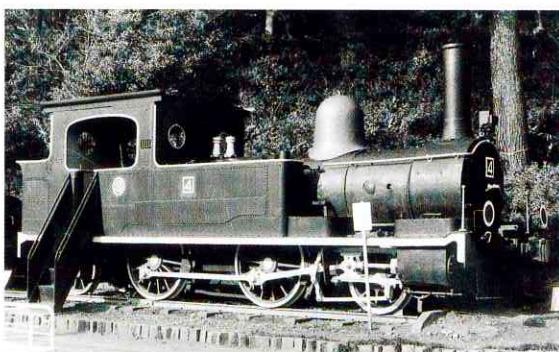
7. 交通機関の布設

1886(明治19)年から1889(明治22)年にかけての企業勃興期に上野・青森間を結ぶ日本鉄道株式会社をはじめとして、全国各地で多くの私有鉄道が布設された。宗徳は、国土の発展と産業の発達を図るには、何よりも交通機関を整備しなければならないと考え、川越から入間川・所沢を経て国分寺にいたる川越鉄道(現西武新宿線と国分寺線)の布設に積極的な活動をつづけた。宗徳は、有力商人や地主層の人々に対し、当地方は人口の規模からみても利用者が多く、また東京方面への物産輸送経費が大幅に削減されることを説いてまわり、その必要性と将来性を強調した。

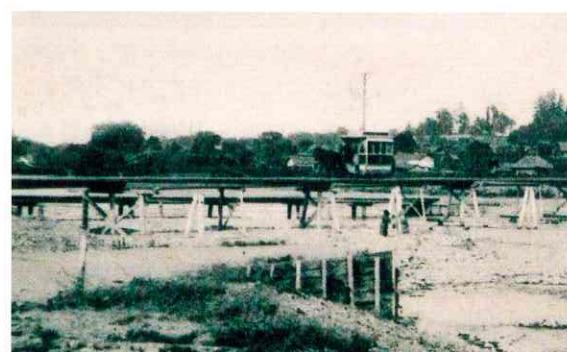
1890(明治23)年、宗徳を総代とする発起人39名により、内務大臣西郷従道^{つぐみち}あてに「川越鉄道布設仮免許状願」が提出され、翌1891(明治24)年にその許可を得た。そして1892(明治25)年、本免状が下付されると、本格的な布設工事に着手した。こうして川越鉄道は、1895(明治28)年3月21日に全面開通し、その後も年ごとに貨客を増やし、地方経済発展の動脈となっていました。

川越鉄道の開通は、入間川・飯能間、あるいは入間川・青梅間の交通機関の必要性を高めた。すなわち川越鉄道に接続させることにより、水富・飯能方面の魚子織などの有力物産を東京やその他の地方に流通させることを目的としていた。こうした要請に応えて1899(明治32)年、入間馬車鉄道株式会社が設立された。入間馬車鉄道の布設に注目し、その特許権を得たのも宗徳であった。しかしその後、宗徳の関心は北海道開拓へ向けられていった。

入間馬車鉄道は、入間川を起点に水富村・元加治村(入間市)^{もとかじ}・精明村(飯能市)^{せいめい}を経て飯能町へいたるもので、株主は社長の増田忠順^{ただより}を筆頭に沿線町村の資産家が大部分を占めていた。馬車鉄道の経営は苦しく、1901(明治34)年5月の開業以来1904(明治37)年まで赤字がつづいた。そこで宗徳は、推されて社長に就任し、同鉄道の再建に乗り出した。宗徳は、サービスの改善と経営の合理化に努め、1912(大正元)年には一切の負債を償却して経営の基盤を固めた。しかし、1915(大正4)年に池袋・飯能間を結ぶ武藏野鉄道(現西武池袋線)が開通すると再び経営難に陥り、1917(大正6)年には解散を余儀なくされた。



川越鉄道機関車



入間馬車鉄道

8. 政界の活動

1863(文久3)年1月、宗徳は父の跡を継いで名主となり、廃藩置県後は戸長兼民事取締役及び開拓勧農掛に任命された。政治活動の始まりである。

この時代の宗徳は、勧業・教育・土木・衛生などに特に力を入れた。その実績が認められ、1879(明治12)年6月、第1回埼玉県会議員に入間郡から選出された。

県会議員になってからも宗徳は、県会において工業化の技術基盤となる理化学教育や土木の重要性を支持し、また病院の設置に積極的な立場をとるなど、その活動の重点を地域の勧業と社会資本の充実、衛生面に置いていた。

1890(明治23)年7月、国会開設に伴い第1回衆議院議員選挙が行われ、埼玉第2区から第2位で当選した。第1位の当選者は、大隈重信の推す高田早苗であった。国会活動では、地租徵収期限の改正運動で特に活躍をしている。

このように、宗徳は地方政治と国政に献身したが、彼の所属する自由党は秩父事件の敗北後は埼玉県では奮わず、宗徳は第2回議員を最後に国会議員を辞め、自由党の基盤拡大に専念する。政治団体の設立と、それを足場とする豊岡町(入間市)の柏谷義三の国会議員当選は、そうした宗徳の努力の成果であった。

柏谷義三は、のちに自由党の後身の政友会幹部となり、大正末年には衆議院議長を務めた人物である。なお、『清水宗徳翁小伝』には、「翁には『爆裂弾』という綽号がある」と宗徳の政治姿勢を紹介したくだりがある。これは、碎きがたい敵党的地盤をも宗徳が出馬すれば必ずその根底を覆して凱旋する様子が、あたかも爆裂弾が金石を粉碎するのに似ているからだという。

9. 教育事業と其の著作

近代化を推進するにあたって教育の重要性を強く認識していた宗徳は、学制の発布以前から上広瀬村に幼童学校を設立して地元の徒弟に教育を施した。またこのような学校教育だけでなく、狭山市域の近代化にとって欠かせない養蚕などの産業についても技術的な教育を行い、『蚕業読本』という著書を残している。

学制が敷かれた後も、学校の建設や設立、諸設備の充実や教員の増員を図るなど尽力した。

著書には他に『入間郡町村名略誌』、また公にはならなかつたが『夢物語』という隨筆も著した。



『蚕業讀本』(左)『入間郡町村名略誌』(右)

10. 敬神と韻事・晩年の抱負

宗徳は、諸事業を推し進める傍ら、他方では神を敬い、詩歌を好んだ。広瀬神社の祠官となつてからは、神祠崇敬の念を人々に説いた。また、北海道開拓に際しては、開拓の地、石狩国空知郡奈井江村字奈江、現在の空知郡奈井江町に広瀬神社の祭神を祀つた奈井江神社を建立し、さらに広瀬神社を郷社から県社へと昇格させている。

また、宗徳は俳句を好み、不朽軒義同と号して、「米のなき日を忘るなよ種卸」や「月澄めば香も一入そうめの花」等の俳句を残している。

晩年の宗徳は、自己の理想をある友人に對して次のように語っている。
「私の志望は、この老骨のつづく限り、郷と県とに尽くし我が郷を理想の里とし、我が県を天下の模範自治体とすることである。すなわち、交通機関を完備して、鉄路を網の目のように走らせ、教育を推し進めて無徳不文の徒を断ち、産業を興して太平の光景を楽しむことである。」

このような宗徳の地域経済構想は、企謀に富み、卓見に満ちていたが、「世人は日が暮れてから提灯を捜すが、自分は朝から提灯をつけて仕事をする。日が暮れて狼狽しないかわりに、先走つて蠅燄の無駄をする」と漏らしたように、自らの手では実現できなかつた。

展示資料一覧

番号	資料名	員数	所蔵者
1	『清水宗徳翁小伝』(原稿) 古谷喜十郎 編著	1	個人蔵
2	清水宗徳肖像画	1	広瀬神社蔵
3	清水宗徳頌徳碑(拓本)	1	広瀬神社蔵
4	清水宗徳(青年期)肖像	1	個人蔵
5	「生糸改正会社につき上申」	1	埼玉県立文書館蔵
6	「蚕糸業入間川組合設置願及び規約」	1	埼玉県立文書館蔵
7	「蚕糸業取締所設立につき清水宗徳建議書」	1	埼玉県立文書館蔵
8	「暢業社製糸場建築取調帳」	1	埼玉県立文書館蔵
9	「暢業社会社設立許可願及び同社仮規則・定款」	1	埼玉県立文書館蔵
10	「暢業社製糸場製糸器械増殖につき上申」	1	埼玉県立文書館蔵
11	掛軸(埼玉県令白根多助作和歌)	1	個人蔵
12	「生糸海外直輸出につき生糸改正会社及び第95国立銀行約定書」	1	埼玉県立文書館蔵
13	広瀬組商標	1	個人蔵
14	魚子織羽織	1	当館蔵
15	魚子織羽織(お宮参り用)	1	個人蔵
16	魚子織角帯	1	当館蔵
17	魚子織の碑(写真)	1	広瀬神社蔵
18	ワールドコロンビア会議婦人理事会書状	1	個人蔵
19	「清水宗徳北海道寄留につき届書」	1	個人蔵
20	「北海道埼玉殖民協会設立願及び認可書」	1	個人蔵
21	「北海道埼玉殖民協会規則」	1	個人蔵
22	「北海道土地払い下げ願」	1	個人蔵
23	「戸長役場修繕費寄付簿」	1	個人蔵
24	「北海道渡道日誌」	1	個人蔵
25	開拓当時の様子(写真)	3	奈井江町教育委員会蔵
26	清水一三肖像	1	個人蔵
27	奈井江神社(写真)	1	
28	開拓始記念碑(写真)	1	奈井江神社蔵
29	奈井江町開拓記念碑(写真)	1	奈井江町蔵
30	奈井江町(写真)	1	株式会社總北海蔵
31	川越鉄道機関車(写真)	1	個人蔵
32	川越鉄道機関車(写真)	1	西武鉄道株式会社蔵
33	「川越鉄道布設につき上申書」	1	個人蔵
34	「川越鉄道布設につき清水宗徳意見書」	1	埼玉県立文書館蔵
35	「川越鉄道仮免許認可請書」	1	埼玉県立文書館蔵
36	「川越鉄道布設本免許下付願及び定款」	1	埼玉県立文書館蔵
37	「川越鉄道布設仮免許状願」	1	埼玉県立文書館蔵
38	「川越鉄道布設につき発起人惣代清水宗徳上申書」	1	埼玉県立文書館蔵
39	川越鉄道屏風	1	個人蔵
40	入間馬車鉄道(写真)	1	個人蔵
41	入間馬車鉄道(写真)	1	当館蔵
42	「入間川・飯能間馬車鉄道敷設既得権他譲受渡契約書」	1	個人蔵
43	砂利採掘の様子(写真)	1	個人蔵
44	砂利採掘の道具(飾)	3	個人蔵
45	「入間郡水富村砂利合資会社設立届」	1	埼玉県立文書館蔵
46	「入間郡水富村入間川砂利合資会社定款」	1	埼玉県立文書館蔵
47	砂利運搬の様子(写真)	1	個人蔵
48	鉄工場(写真)	1	個人蔵
49	製品と清水一三(写真)	1	個人蔵
50	衆議院議員一覧表	1	個人蔵
51	帝国衆議院会議の図(写真)	1	憲政記念館蔵
52	柏谷義三肖像	1	入間市博物館蔵
53	「唯一クラブ」会員名簿	1	個人蔵
54	「唯一クラブ」規約	1	個人蔵
55	「北海道開拓地学校建設につき官有建物払い下げ願い」	1	個人蔵
56	『蚕業説本』	1	個人蔵
57	『入間郡町村名略誌』	1	個人蔵
58	再建当時(明治42年)の広瀬神社(写真)	1	個人蔵
59	清水宗徳の句	1	個人蔵
60	蔵書	16	個人蔵
61	硯	1	個人蔵
62	文箱・書状	1	個人蔵
63	芭蕉句碑(写真)	1	広瀬神社蔵
64	入間川越生間新道開鑿記念碑(拓本)	1	個人蔵
65	「使人知靈」の碑(拓本)	1	狹山市蔵
66	墓石(写真)	1	個人蔵
67	掛軸(清水宗徳肖像)	1	個人蔵

※期間中、一部展示替えを行います。